

## 「ふたりのために」

ジョナサン・ベネディクト



ジョナサン・ベネディクト著

『ふたりのために』

四六判変形上製本、122ページ

定価 1,575円

FFJのベストセラー「ふたりのために」は、9刷りができあがり好評発売中です。本書には、結婚生活に必要な聖書からの知恵がつまっています。

本誌の「新米パパとママのために」でおなじみのジョナサン・ベネディクトが新婚夫婦に向けて執筆したもので、結婚が決まった方へのプレゼントに広く用いていただいています。

1話が見開き2ページなので、短い時間に少しずつ読めます。

ますし、具体例が豊富で適応しやすい内容です。未信者の方へも、気軽に手渡せます。新婚の時を過ぎたご夫婦にも、お勧めです。結婚の意味、結婚生活のあり方を見つめ直し、さらに充実した毎日をお過ごしください。

## ■結婚式

結婚の三つの柱

① 離れる

「絆を断ち切る」

結婚1年目に、自分が、断ち切るべき親との絆をきちんと切っておかなかったことに

気づくことがよくあります。たとえば、夫が妻の作る料理に対して、勝手な期待を抱くこともその一例です。男性は、ふつう母親の料理に強い愛着を持っていて、「おふくろの味」という言い方をします。「男の心をつかむには、胃袋をつかめ。」と言う人もいるくらいです。母親は、息子の好物をよく知っており、これが母と息子とのひとつの絆になっています。ですから、結婚しても、妻が自分の慣れ親しんだ料理を作ってくれるものと無意識に期待します。彼が意識して母親の料理を「離れ」、妻のやり方を批判せずに受け入れるのでなければ、ここで新婚夫婦のぶつかりあい起きるのには目に見えています。

私の知り合いに、「おふくろの味」を作らせるために妻にあれこれと指示していた男性がいました。彼は、鍋の前に陣取って、妻にああしろ、こうしろと命令したので、妻は、すっかり料理に自信をなくし

てしまいました。彼女は彼女なりにベストを尽くしたのですが、彼の方は満足せず、おふくろと同じ味にすることを要求したのです。これでは、妻に対して失礼というもので、彼が、「自分の父と母を離れて」いなかったことの証拠です。

しかしついに、彼は気がつきました。教会で誓いの言葉を交わした時に、自分は「おふくろの味を」離れるべきだったのだと。それで、その若い夫は妻に言いました。

「これからは君がおいしいと思うものを作って。ぼくはそれを喜んで食べるから。」  
それで彼女はプレッシャーから解放され、それから二人は、自分たちのオリジナルな味を新しく作り出すことができたのです。

